

第 28 号

平成 18 年 4 月発行

通機会 Web ページ <http://www.ims.mce.uec.ac.jp/tsukikai/>

第 7 回通機会総会開催のご案内

通機会会長 (株) 荏原総合研究所 丸田芳幸

記録更新の大雪、例年にない寒波の厳しい冬が過ぎ、桜を楽しむ季節も終盤近くになりました。通機会会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。新年度・新学期を迎えて、新たな気持ちで各方面にてご活躍のことと存じます。

通機会におきましても、本年は会則に従いまして 4 年に一度の総会を開催し、併せて会長、副会長他役員の変更を行う年にあたります。

平成 14 年 5 月の第 6 回総会にて会長職を拝命致しましてから、4 年間にわたり活動してまいりましたが退任の時節となりました。この間、産業界の景気動向よりも大きく大学を取り巻く環境が変わりましたが、副会長および幹事の方々をはじめ会員の皆様には多大なるご指導とご協力をいただき、その任を終えることができますことを深く感謝申し上げます。

本学におかれましても平成 16 年 4 月から独立法人化が行われ、国立大学法人電気通信大学が大学を運営する形になりました。55 年間続いた国立大学の体制を離れて、独自性を持った教育・研究組織となり、次世代へ向けての脱皮が進められております。平成 17 年 9 月には (社) 日本機械学会の年次大会が 24 年ぶりに本学において開催され、学外の数多くの皆様に発展中の電気通信大学の現状を見ていただくことができました。なお、この折には通機会の発起人である梶谷前学長を大会委員長として、知能機械工学科の先生方が実行委員となり、年次大会の企画運営を担当し、参加者総数 3217 名という過去最大規模の年次大会を成功させることができました。

通機会は、卒業生の単なる親睦会というものではなく、「社会と大学との掛け橋」なる役割を負うことが多いと位置付け、社会・産業界で活動している会員各位と本学知能機械工学科との交流をサポートして参りました。4 年間に通機会が主催または後援した特別講演会は 8 回開催され、産業

界のトピックスが学内へ紹介されました。一方、産業界の平成不況は回復基調になっているものの、業種や企業によって格差が現れています。モノ作りを基本にする製造業の中でもオンリーワンやナンバーワンに残った企業の好況が報じられており、併せて独自性が有る技術開発の重要性が強調されています。独立法人になった大学では、産学連携の研究活動や技術開発をより活発に実施することが可能になっていますので、より多くの製造業が好況になるために産学連携が益々有効に機能するものと推察します。そして、通機会はその橋渡しの役割を継続して行きたいと思っております。

さて、下記のように通機会の総会を開催致します。総会に併せて、「ゆとり教育世代の大学教育」をテーマとするパネルディスカッションを行います。企業は電通大の卒業生に何を期待し、学生は何を期待して電通大に入学するののかに関する活発な意見交換に参加していただき、これからの産学連携への理解を深められることを期待しております。会員各位におかれましては、4 年に一度の機会ですので万障お繰り合わせの上、ご参加いただきますようお願い致します。

記

開催日：平成 18 年 5 月 27 日 (土)

(1) 通常総会

時間：14:00 ~ 14:45

場所：電気通信大学創立 80 周年記念会館
(リサーチ) 3 階・フォーラム

(2) パネルディスカッション

時間：15:00 ~ 17:00

場所：電気通信大学創立 80 周年記念会館
(リサーチ) 3 階・フォーラム

テーマ：「ゆとり教育世代の大学教育 - 大学は社会 / 学生の要望にどこまでこたえられるか? -」

内容：マスコミにもたびたび取り上げられていきますように、最近の学生気質は一昔前とはかなり変わってきています。意外に思われる OB も多い

かもしれませんが、キャリアデザインの講義が学生の人気を集めるなど、電通大も例外ではありません。特に今年の4月からはいわゆる“ゆとり教育”を志向した学習指導要領のもとで高校時代を過ごした学生が入学しはじめ、従来のレベルやスタイルの専門教育がますます難しくなることが危惧されています。しかし一方で、機械系学科の卒業生に対して社会が期待している最低限の素養は大きく変わっていないのではないのでしょうか。このような背景を念頭に置きながら、企業は電通大の卒業生に何を期待しているのか、学生は何を期待して電通大に入って来ているのか、限られた規模のスタッフと設備で大学はどこまで対応できるのか、それぞれの立場での意見を交換し、ゆとり教育世代を迎え入れた大学が抱える問題の解決の緒を探してみたいと思います。

(3) 懇親会

時間：17:30～19:30

場所：電気通信大学学生会館3階ハルモニア

会費：5,000円

定年退職に当たって

元知能機械工学科教授 灰塚 正次



1966年に助手となって以来、歯車を回し続けること約40年、本年3月一杯で定年退職となります。この間学生と共に試験装置と試験歯車を造り続けてきました。現在の機械工場は冷暖房完備で、設備は多少古くはなっ

てきましたが精度も良く立派なものです。思い起こしますと、本学科創設当時の工場は、南極越冬隊の資材置き場を永田町から移設したものとこのことで、木造で屋根がやたらと高くすき間だらけで、冬場は極めて厳しい環境下にありました。その設備はというと、東大にて廃棄寸前の旋盤、フライス盤等を譲り受け、これを使用可能なように近くの町工場にてオーバーホールしたとのことでした。これらは必ずしも送りもままならず、精度うんぬん以前の代物でしたが、これがかえって加工

技術を磨くこととなりました。これらは何れも文部省の予算がない中、通信機械工学科創設にご尽力頂いた武井健三先生の交渉のもと、文部省からやっと入手したものです。その後の日本の経済発展に伴って学生数、教員数ともに増え、本学科の研究・教育体制は、今日のように充実したものとなってきました。これに呼応して機械工場とその設備も年々立派なものになり、創設当時の環境を思い出すと感無量です。

学内では、着任早々大学紛争に遭遇し、その後も多人数教育、短期大学部での学生数不足（最悪時は所属コース入学定員の約1/3以下）、博士課程の設置、短期大学部閉学と夜間主コースの設置、大綱化、国立大学の法人化とめまぐるしい変化の連続でした。これからも更に、改革と厳しい要求が続くことが予想されますが、皆さまの英知できっと乗り切っていけると信じています。

2004年国立大学が法人化され、外部からの大学の評価は、教職員の業績に加えて、今まで以上に卒業生の社会での活躍が重要視されそうです。本OB会は、大学と卒業生とのコミュニケーションの場として、その役割が益々大きくなるものと思われまます。本会の目的は、卒業生、学生及び教職員間の連絡と親睦を図るとあります通り、会員の皆さまには本会を大いに活用して頂き、技術相談、研究相談から共同研究にまで進展することを期待しております。また、1991年に田中榮先生の勲2等旭日重光章の叙勲と博士課程設置を記念して、先生からの多大なご寄付により設けられた田中榮賞の受賞者が、発足当時の予想数を上回っていることは喜ばしい限りです。多くの卒業生が本学科で博士の学位取得にチャレンジされ、本賞を受賞されることを切望しております。

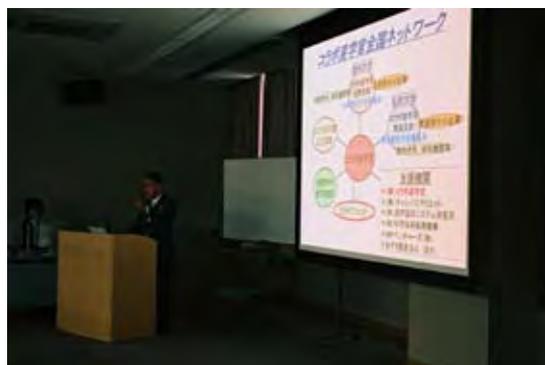
研究室での研究は典型的な3K（きつい、汚い、危険）にも拘わらず、積極的に実験に携わって頂いた卒業生の皆さまに感謝致します。大きな失敗も何度か致しましたが、何時も温かい目で見て頂き、好きな実験を悠々とさせて頂きました本学科に感謝致します。この分野は縁の下の力持的存在で、脚光を浴びることとはほとんど無縁と思われまます。もの造りには欠かせない重要なものであることは間違いありません。一技術者、研究者または教員として本学と歯車工業界に幾分かの貢献ができていれば幸いです。通機会の皆さまと本学の益々のご発展を祈念して定年退職の挨拶とさせていただきます。

機械学会年次大会を開催して

実行委員長 越智 保雄

日本機械学会 2005 年度年次大会は、9 月 19 日（月）から 22 日（木）までの 4 日間、電気通信大学を会場として開催され、一般講演 1482 件、特別講演 1 件、特別企画 8 件、実行委員会企画 6 件、先端技術フォーラム 14 件、ワークショップ 23 件、ならびに基調講演 35 件という盛り沢山の行事が行われました。4 日間を通じて天候に恵まれ、参加者総数は 3200 名を超えるという盛会となりました。

初日の 9 月 19 日（祝日）は市民フォーラムとして「新カリキュラムによる高校物理教育と工系系大学」や「トップアスリートを支える技術から健康作りのサポートまで」などが開催され、一般市民を含む合計 200 名以上の方が参加して熱心な議論が交わされました。中でも、ものづくり教育市民フォーラムの一環として行われた小中学生によるロボットコンテスト「ガラクタ合戦」では 18 名の小中学生が競技に参加して多くの父兄や子供が見守る中、熱戦を繰り広げました。20 日からは学術講演会がスタートし、40 室に分かれて数多くの企画と研究成果発表が行われ活発な質疑が行われました。特別企画として「ワークショップ－大学院教育を考える」や「女性フォーラム－機械工学・技術分野におけるキャリア教育」などが行われ、問題提起や今後の取り組みについて熱心に議論が交わされました。さらに実行委員会企画の「学生ベンチャーアイデアコンテスト」には 11 件の応募があり、プレゼンテーションとポスターによる発表が行われ、審査の結果 1 件の最優



秀賞と 2 件の優秀賞が選ばれました。21 日には実行委員会企画の産官学フォーラム「実りある産官学連携の戦略と実践」が行われ、今後の産官学連携のあり方について産業界、大学からの提言と議論が熱心に行われました。同日の午後には、本学の松野文俊教授による特別講演「レスキュー工学の構築－国際救助隊サンダーバード実現に向けて」が講堂で行われました。約 250 名の聴衆に対して、阪神・淡路大震災をきっかけとしてレスキュー工学に係わったいきさつ、その後の研究活動の経緯・現状を映像と実際のレスキューロボットのデモを交えて紹介されました。

最後に実行委員会を代表して、大会の実行にご協力頂いた電気通信大学の教職員、アルバイトの学生諸君、調布市の関係の方々、（株）京王観光、ならびに日本機械学会の関係職員各位に厚く御礼を申し上げます。

講座紹介

4 回目となりました知能機械工学科の講座紹介記事を掲載致します。今回は、人間・機械システム学講座の 4 分野について紹介します。

バイオエンジニアリング分野：本分野は、本間恭二教授、小池卓二助教授、村上小百合助手の教員のほか、順天堂大学の医師、大学院博士後期課程学生 1 名、同前期課程学生 10 名、学部 4 年生 11 名（2005 年度）で構成されています。本学科におけるこの分野の立ち上げをご存じない方が多いと思いますが、1999 年の大学改組によって知

能機械工学科が誕生したとき、それまで固体力学分野に所属していた本間教授が人間・機械システム学講座のこの分野を担当し、その後村上助手、小池助教授を迎え、現在の体制になったものです。

バイオエンジニアリング分野では、生物の持つ高度に発達した器官の構造や機能に着目し、植物の環境ストレスや貝の持つ接着蛋白質の機械的性質などの解析、医療分野と連携した人体の聴覚機能回復の研究や新しい補聴器の開発、神経回路網をモデル化したアルゴリズムによる音源探査や非破壊検査への応用などについて、国内・国外の研究者と交流を持ちながら、鋭意研究に取り組んでいます。

ヒューマンインタフェース分野：本分野は、松野文俊教授、稲見昌彦助教授、福島宏明助手によって運営されており、ポスドク研究員5名と学生38名（博士後期3名、博士前期23名、学部4年12名）が所属している（2005年度）。松野教授・福島助手らの研究室は、「2050年までに国際救援隊『サンダーバード』を実現する」というスローガンを掲げ、災害現場でレスキュー活動を支援するロボットの開発を行っている。また、モデル予測制御や分布定数系制御などの最先端制御理論を研究するとともに、柔軟宇宙構造物の制御、複数のロボットの協調制御などへの応用研究を行っている。稲見助教授らの研究室は、バーチャルリアリティ技術とロボット工学を用いたヒューマンインタフェースの研究を行っており、再帰性投影技術、ロボット型ユーザインタフェース、作業支援ロボットの開発などの新規性の高いテーマに取り組んでいる。両研究室とも論文発表のみならず、国際的なコンテストや展示会で好成績を収めており、海外からの注目度も高い。また、両研究室合同の合宿では専門と異なる自由なテーマを発表する「裏研究発表会」が開かれるなど研究以外にもユニークな活動が行われている。

人間・機械環境工学分野：本分野は青山教授、淵脇助手のほかに臼田客員助教授（産総研）、見崎特別研究員（静岡理工大）で構成されています。ここでは微細な精密作業能力を有する昆虫サイズのマイクロ・ロボット群および支援システム

の開発とこれらを用いた“デスクトップ・マイクロ・ロボット・ファクトリーの構築”に向けて研究開発を行っています。圧電アクチュエータと電磁石で構成される超小型ロボットに作業機器、マイクロセンサーを搭載し、ナノ領域の微細な作業を実現しています。最近では“人工受精や細胞操作するマイクロ・ロボット”や“電子顕微鏡内で動作するマイクロ・ロボット”、さらにインターネットを利用した遠隔制御システム、災害時被災者探査用マイクロロボットについても検討しています。さらに研究成果を直接、社会で活用するために、また現場のニーズに合ったマイクロロボットを設計開発するために大学発ベンチャー会社“アプライド・マイクロシステム”[www.applied-micro-systems.net]を興し、本社を学内SVBL棟に置きマイクロロボットシステムの実用化・商品化を行っています。将来、卒研究生の開発したロボットがそのまま商品化され、世の中で売れることを祈りながら研究活動を続けています。

スポーツ科学分野：本分野は岡田助教授により運営されており、主に人間の動作解析を中心としたヒューマンパフォーマンスの評価に関する研究に取り組んでいる。知能機械工学科の多くの研究室では、“ものづくり”を目指した基礎的研究、実践・応用的研究に取り組んでいるが、本研究室の主眼は、人間の身体運動の現場（運動処方、スポーツのコーチング、学校体育、社会体育、日常生活等）に有用な科学的知見を発信することである。例えば、中年期以降は加齢にともなって身体諸機能が衰えてくるが、如何にすれば衰えを遅らせられるか？衰えの幅を少なくできるか？といった問題に主に動作学的なアプローチから取り組んでいる。身体機能の衰えを道具や環境整備で補おうとする“ものづくり”の発想とは異なる発想であり、知能機械工学科の中では少し毛色の異なる研究室といえる。異なる発想同士の融合から、新たな発想が芽生えることも期待しつつ、現在は、①中高年者の歩行中の下肢筋機能の解析、②人体の効率の測定とその応用、③競技者の運動技術の力学的記述、④競技者の競技力向上のための科学的支援などのテーマに取り組んでいる。

特別講演会

題目 「人と人工物の相互作用と協調」
講師 グリフィッス大学 Prof. Ljubo VLACIC
開催日 平成 17 年 5 月 26 日 (木)
概要 協調自律運転システム、動的な障害物のセンシングシステム、協調的多目標とインタラクティブコンピュータゲーム環境などの研究話題について、最新の研究成果を交えながらご講演いただきました。

題目 「モータサイクルにおける軽量化設計と材料・製造技術」
講師 ヤマハ発動機(株) 小池 俊勝
開催日 平成 17 年 7 月 4 日 (月)
概要 モータサイクルのエンジン部品やリアアーム等の車体に使用される軽量化コンポーネントについて、設計の考え方と最近の材料・製造技術についてご講演いただきました。

第 19 回 田中栄賞受賞者

平成 17 年 6 月

桑田 喜隆 (論文博士 (工学))
「ミッションクリティカル・タスクにおける意思決定支援に関する研究」(紹介教員: 松野教授)

平成 18 年 3 月

池田 裕一 (課程博士 (工学))
「受動性に基づいた宇宙機の非線形制御に関する研究」(指導教員: 木田教授)

岡野 竜太郎 (課程博士 (工学))
「線形ダイナミカルシステムの安定性解析と最適制御系設計」(指導教員: 木田教授)

金 英俊 (課程博士 (工学))
「逐次打点法による面内曲げ加工に関する研究」(指導教員: 村田教授)

李 光焰 (課程博士 (工学))
「軌道上で伸展する宇宙構造物のロバスト制御系設計」(指導教員: 木田教授)

上田 之雄 (論文博士 (工学))
「散乱体内の光路長分布に基づく拡散光トモグラフィの研究」(紹介教員: 山田教授)

大竹 博 (論文博士 (工学))
「Advanced Fuzzy Systems Representation and Matrix Inequality-based Designs」(紹介教員: 田中教授)

田中栄賞受賞にあたり

機械制御工学専攻 池田 裕一

この度は博士(工学)の学位に加え、榮譽ある田中栄賞を頂き、誠にありがとうございます。通機会の関係各位の皆様には厚く御礼申し上げます。学位論文では、次世代の宇宙開発において要求されるミッションを実現するための宇宙機の制御系設計に関する研究を行いました。この研究を進めるにあたって、終始、懇切なご指導とご助言を頂いた木田隆教授と長塩知之助手をはじめ、多くの方々にご協力を頂きました。この場をお借りして、ご協力頂いた皆様に謹んで感謝申し上げます。

学位取得を振り返って

電気通信大学 知能機械工学科 大竹 博

この度は博士(工学)の学位に加え、榮譽ある田中栄賞を賜り、誠にありがとうございます。通機会の皆様に深く御礼申し上げます。

私は平成 9 年に新潟県の長岡高専から電気通信大学の機械制御工学科 3 年に編入学し、卒業研究では、人間の技能やコツについての研究を行い、修士課程、博士課程では、ファジィ制御に関する理論的な研究に従事しました。博士課程 2 年の時に大学を中退し、知能機械工学科の助手となり、それから 2 年で学位の取得にまで到達できましたのは、田中一男先生の熱心なご指導と山藤和男先生、田中孝之先生の暖かいご支援および知能機械工学科の諸先生方のご協力のおかげであると感謝いたしております。改めて御礼申し上げます。

英国白鳥海滞在記

知能機械工学科 助教授 久保木 孝

お陰様で、約 11 ヶ月の英国での海外先進教育研究プログラムを終え、昨年 9 月に帰国致しました。皆様方には出発の際は数々のアドバイスを頂戴し、渡英中には職務を代行して戴き、また、帰国しては温かく迎えて戴き、有り難うございました。心より感謝申し上げます。

英国は北緯 50 ~ 60°、樺太と同緯度に位置しますが、周知の通り、暖流の影響を受けて、寒暖の差が少なく過ごしやすい気候です。London では、

気温が冬は東京より少し寒く、夏は北海道と同程度です。当該プログラムにて、Londonの西方約300kmに位置するWales州第2の都市、Swanseaにて、研究生活を過ごさせて戴きました。Swanseaは、和訳するとタイトルの通り白鳥海となりますが、現地のWales語では「Tawe川の河口」を意味するAbertaweと呼ばれています。

Swanseaの街の西はずれに位置するWales大学Swansea校の土木工学科・専攻にて、Owen教授とOwen教授が率いる大学内企業：Rockfield Software Ltd.のメンバーと共同研究を展開致しました。具体的には、①ミクロスケールにおける材料組織の情報からマクロスケールにおける塑性変形挙動を予測するための解析モデルの構築、②先駆的な教育と大学内企業の運営方法の考察、③有限要素法の動向調査などを実施致しました。

この内、②先駆的な教育と大学内企業に関する話をご紹介します。同校の土木工学科・専攻には、1960年頃から有限要素法の研究で活躍され、多数の有限要素法テキスト等も著された著名なZienkiewicz教授がおられます。Zienkiewicz教授らの実績・功績を活かし、各研究室では有限要素法に特化した研究を推進し、特色のある大学作り成功しています。これにより、論文数や外部資金獲得の観点から実施される外部評価において、7段階中最高の評価5*を受けているようです。

Owen教授が創立した大学内企業も大学の評価向上に貢献しており、東欧や中国からのPhD取得を目的とした学生を大学内企業で研究させ、学生がPhDを取得した後も、関係を維持、ネットワークを拡大しています。さらに、学生の研究成果は大学内企業の解析ソフトウェアに取り込み研究・技術レベルを上げるために活用します。やはり英国人は、組織・枠組み作りに長けているようです。

英国人が長けているのは組織・枠組み作りだけでは有りません。大学内企業の代表取締役ランス氏は、「特に優秀な人材はPhD取得後にも残って研究を続けて貰う。優秀でない者は米国に送り込む。」とニヤリとしながら話してくれました。この手の皮肉を込めた言い回しは、英国人には敵いそうにありません。小職も数回、痛い目にありました。あれは、ラグビーの日本代表チームが、ウェールズ代表チームに0対98のスコアで大敗した翌週。(ランス氏)「先週のラグビーの試合見たか？ウェールズは今一精彩を欠いていたよな。」(小

職)「??」、(ランス氏)「だって、ウェールズは100点に及ばなかつた。スコットランドは日本に100対0で勝ったのに。」とのことでした。皆様の中に、うまい切り返し方を思いついた方がいらっしゃいましたら、ご教示いただきたくお願い致します。

研究の面でも、時に帯状疱疹やシラミなど慣れない病気に悩まされることはありましたが、お陰様で、スケジュール通りに推進することができました。高度なマクロスケールでの解析技術を有するWales大学において、当方が有するミクロスケールでの知見・技術を組み合わせることにより、当初の目標を達成いたしました。取り組みましたミクロとマクロを結びつけるマルチスケールな解析手法は、今後の一つのトレンドと考えられ、また、精度良く、塑性加工などの現象を解明するためには、必須の技術と考えております。さらには、特に欧州において有限要素法研究に強みを持つWales大学と、連携して研究を進めて行く基盤ができたことも一つの成果と考えております。皆様のご協力があって、海外先進教育研究プログラムを、教育面・研究面とも、予定通り遂行することができました。この度の機会を与えて戴いた本学教職員の皆様、特に、多大なご支援を戴いた村田眞教授に厚く御礼申し上げます。

米国 MIT 滞在記

知能機械工学科 教授 稲見 昌彦

7月4日アメリカ独立記念日の夕刻、チャールズ川をまたぐロングフェロー橋。ボストンオーケストラによる米国国歌演奏終了のタイミングを狙い4機のジェット戦闘機が頭上を掠める。河辺から花火が一斉に上がりボストンの夜空を鮮やかに染め上げる。クルーザーで溢れる河面とダウンタウンの高層ビル群の窓で不規則に反射された花火の鏡像も唱和する。心地よい夜風を受けながら自らの数ヶ月の滞在を思い返した…

このたび海外先進教育実践支援プログラムにて平成17年3月より8月まで米国ケンブリッジ市マサチューセッツ工科大学コンピュータ科学・人工知能研究所に客員科学者として滞在しました。

私が滞在したラボはProject AIRE (Agent-based

Intelligent Reactive Environments) という Dr. Howard Shrobe が率いる環境知能化に関する研究を行っています。携帯端末や屋内、街頭にコンピュータを偏在させ、言語やジェスチャーを認識しながら行動支援を行うことを目指した近年はユビキタス技術と呼ばれる分野で先進的な研究を行っています。

私自身の研究の興味はロボット、人工現実感などメカトロニクス技術を背景にした人間行動の支援で人工知能的なアプローチは除外していました。そこで敢えて人工知能の総本山の一つに滞在することで一体彼らが何を面白いと思ひ、何を解決しようと思っているのか少しでも類推したいというのがこのラボを選んだ一番の理由になります。

ラボの雰囲気は米国西海岸の企業研究所の雰囲気が色濃く出ており、冷蔵庫に常備されているソフトドリンク類は飲み放題。毎日訪問研究者によるセミナーがあり、毎週木曜夜はケータリングのディナーを頂きながらフリーディスカッションとホームシックになる暇の無いぐらい充実しつつも寛いだ環境で研究生生活を送ることができました。半年弱の滞在期間では共同研究を立ち上げることが精一杯でしたがこの経験を教育研究活動に少しでも役立てることができればと思っております。

最後になりますが不在の間ご不便、ご迷惑をおかけしつつもご支援頂いた知能機械工学科の先生方に深く御礼申し上げます。

MIT Project AIRE の web ページ
<http://aire.csail.mit.edu/>



Stata Center 全景

学内情報この一年

1. 教職員の異動など

平成 17 年 10 月 1 日
横内康人助教授 教授に昇任
平成 17 年 11 月 1 日
角田直人助手 九州大学へ転出
平成 18 年 3 月 31 日
灰塚正次教授 定年退職
平成 18 年 4 月 1 日
稲見昌彦助教授 教授に昇任
井上全人助手、採用 (石川・結城研究室)
大川晋平助手、採用 (山田研究室)

2. 海外先進教育研究実践支援プログラムに伴う長期出張

平成 16 年 10 月 21 日～平成 17 年 9 月 11 日
久保木孝助教授 (イギリス)
平成 17 年 3 月 22 日～平成 17 年 5 月 31 日
青山尚之教授 (タイ)
平成 17 年 3 月 26 日～平成 17 年 8 月 21 日
稲見昌彦助教授 (アメリカ)

3. 卒業生と新入生の記録

平成 17 年 9 月 28 日 9 月期卒業式
大学院 機械制御工学専攻
博士前期課程 1 名
平成 17 年 10 月 6 日 10 月期入学式
大学院 知能機械工学専攻
博士後期課程 1 名
平成 18 年 3 月 24 日 卒業式
学部 知能機械工学科
A コース 107 名・B コース 24 名
機械制御工学科
A コース 2 名
大学院 知能機械工学専攻
博士前期課程 83 名
機械制御工学専攻
博士後期課程 4 名
平成 18 年 4 月 7 日 入学式
学部 知能機械工学科
A コース 110 名・B コース 31 名
大学院 知能機械工学専攻
博士前期課程 85 名
博士後期課程 8 名
学部編入学
知能機械工学科
A コース 7 名・B コース 1 名